

## 続 櫻の木の下で (36)

阿木津 英



「歌に民主主義はないんだ！」と歌会中にどなったのは、石田比呂志。直観的に納得できて、以後それを疑いもしなかった。だいぶのちにどこかで玉城徹も、民主主義は政治の世界だけの話だ、と書いていた。

ところが昨今、どうも様子が変わってきた。一、二ヶ月前、歌誌「塔」を読んでいたら、歌会に上下関係は必要ないという意見があった。最後にえらそうに締めの方を言う人がいるなんておかしいじゃないか、という意見も聞いたことがある。こういう考え方の延長上には、添削選歌の否定があり、結社の否定があるだろう。添削選歌になじまない人はぜひぶん以前から現われていたし、結社に若者が入らず、フラットなネット歌会にあつまるのもまた同じ流れだろう。

直観的に理解したものは、あまり考え詰めることがない。

なぜ「歌には民主主義がない」のか、これまであまり考えもしなかったが、「塔」で読んだ文章が何度か意識にのぼることがあった。

\*

そんなとき、猪木武徳著『社会思想としてのクラシック音楽』（新潮選書）に出会った。猪木武徳はそもそも経済学者、クラシック音楽は少年の頃に出会って、以後趣味として関わってきたという。読んでみると、並の趣味ではない。聴くのはもちろん、楽譜も読んで研究するし、みずから演奏もする。音楽芸術をふかく理解していることがわかった。

社会思想からみたクラシック音楽の変遷と作曲家の思想の解明は、じつに興味ぶかく、示唆に満ちてたのしいものだったが、何よりも心ゆく思いをしたのは、ところどころに現われる、つぎのようなフレーズだった。

（スメタナ、ドヴォルザーク、チャイコフスキー、またチェコ語という民族の言語と音楽との関係に徹底した探究を行って普遍性に到達したヤナーチェクら）彼らの魅力あふれる作品は、体制に対する政治意識と直接強く結びついていたわけではない。音楽家がひとりの人間として、人間と社会に正面から向き合ったときに発出される、地上では得られないものを渴望する息吹のように感じられる。

人間にとって芸術は、内的な精神に関わる営為であり、人間は現実の物的世界をそのまま無批判に受け入れられるだけの存在ではない。美のイデア、「気高いもの、高貴なもの」を自由に希求する存在でもある。そうした芸術への渴望を癒すためにも、伝統としての芸術、将来への希望を生み出すための芸術の根を枯らしてはならない。

人間というものは本来、地上では得られないような美のイデア（理想）、気高いもの、高貴なものに対する渴望を抑え難い存在であり、どんなに力で抑圧されてもそれを希求しないではいられない存在である。人間のこの渴望と希求とこそが、芸術を生み出してきた——。著者猪木武徳は、このことを身のうちに実感をもって知っている。それが、読んでいてわかる。

\*

猪木武徳は、とりわけ十九世紀のフランスの政治家・思想家であったトクヴィルの『アメリカのデモクラシー』を引用しながら、つぎのように述べてゆく。

この渴望と希求とを根絶やしにするのが、リベラル・デモクラシーという社会体制である。デモクラシーと市場経済のもとでは、「数だけ」が物事の最終的な決定原理である。そこでは量の多寡で価値づけられ、多数者が支配する。「多数の専制」だ。

政治体制としてのデモクラシーは、人びとの関心を「いま、ここ」に集中させ、また一人一人を砂粒のように孤立させる。いわゆる「今だけ、金だけ、自分だけ」の世界だ。そこでは未来にも過去にも関心を失い、他者や異質なものに対して想像力は働かない。

専制政治下では究極のところ内面までは支配し得ないが、リベラル・デモクラシー体制のもとでは行動のみならず、心の中で画一化してしまう。「大衆」とは心が画一化したマスなのだ」。

\*

デモクラシーの「一人一票」という平等原則と「多数者の支配」は、批判し序列をつけることを避ける傾向を生み出す。みんな個性があつてみんな良い、感じたものをそのまま表現すればそれで良い、といったふうになる。

しかしそこには長い時間を要する厳しい技術的訓練という側面が欠落している。音楽にも、絵を描くにも、文章を書くにもルールがある。それを学ぶためには、多くの時間をかけて沢山の優れた音楽を聴き、絵画を観、沢山の良い文章を読むという感性を耕すための知的訓練が必要となる。

こういう文章にも膝を叩きたくなるような思いがする。わたしは直観的にそれを信じてきた。しかし、平等原

則に貫かれた情操教育を受け、「多数者の支配」を当然として受け入れる人びとのあいだでは、まだるこしい時間のかかる階梯の意味が理解できず、「いいね」の数や「売れてる」ことが絶対の価値基準となるものもしれない。

じつは振り返って見れば、そういうわたし自身だって、自由と平等を奉ずる戦後デモクラシーのもとに生れて、自由を愛し、形式を嫌った。文語定型詩なんていう古くさい短歌など、やるつもりは毛頭なかった。短歌を始めてからも、なんでも五七五七七なんだ、と心中うべないがたかった。

猪木武徳はいう。「音楽は、形式に縛られてこそ内容の美しさが立ち現れるものであり、単なる感情の自由気ままな表現の中には美は見いだせないはずだ」。

同じような言葉を石田比呂志から聞いた。岡井隆もそう書いていたような気がする。だが、懷疑は深かった。

怒られるから、面従腹背である。形式というものが、どうしても納得しがたく、それが短歌をつくるわたしに不自由だった。短歌だけではない、世のあらゆる形式と秩序が問題だった。

\*

猪木武徳は、自由と平等を奉じるリベラル・デモクラシー体制下に生れる人間類型が、芸術の根を枯らしてしまうだろう、というのである。それに気づいて欲しい。このままゆけば、「多数者の支配」すなわち「多数の専制」がもたらす無

秩序か、政治権力に強いられる見せかけの秩序」かに陥るしかない。それはいずれも、自由の精神から遠く離れたものだという。無秩序という、見せかけの「自由の精神」はついに何ものをも創造しないだろう。

\*

しばしば引用されるトクヴィルという思想家を、わたしは知らなかった。さっそく『アメリカのデモクラシー』計四巻（岩波文庫）と、ついでに宇野重規著『トクヴィル 平等と不平等の理論家』（講談社学術文庫）をもとめ、薄い宇野重規の方から読み始めた。

フランスの貴族社会の一員として生れた青年トクヴィルは、一八三〇年代のアメリカに渡って、そこに「デモクラシー」の精神の成立しているのを見る。三年間滞在し、帰ってから書いた著書『アメリカのデモクラシー』は、アメリカではアイデンティティの抛り所としてもっとも読まれる二書のうちのひとつとなったという。一方、政体の異なるフランスでは忘れ去られた過去の書となっていた。それが、二十一世紀に入ろうとする前後から再評価が始まり、ネット社会となった現代、ますますその平等と不平等の研究は重要性を増しているという。

名門貴族の一員であったトクヴィルは「アリストクラシー」（貴族政）を熟知し、そこからアメリカの「デモクラシー」（民主政）を観察した。「デモクラシー」への移行は不可逆

的だと考え、そこに希望を見出したが、「デモクラシー」のもたらす〈民主的人間〉の負の側面をもするどく深く指摘した。しかし、「デモクラシー」には自己の誤謬を修正する能力がある。その負の側面を救出する「デモクラシー」の自己変革能力」として、トクヴィルは「結社」「宗教」「自治と陪審」を探究したという。

猪木武徳は、「デモクラシー」の自己変革能力」として「宗教」とともに「芸術」に希望をたくしたのではないか。

\*

歌という「芸術」を離れなかつたおかげで、あらゆる形式に懷疑をもつたわたしも、石田比呂志や玉城徹のような保守的な歌人に出会い、面従腹背しつつも、しじゅう形式や秩序について考えないではいられなかった。

いま、わたしは「形式に縛られてこそ内容の美しさが立ち現れる」とは考えない。そういう考え方には、やはり抵抗がある。

美の原型は、自然の中にある。自然の秩序をわたしたちは学び、それをおのれの作品のなかに実現するのである。

そういう営みを先人がつづけた結果としての、いま形式化しているこの秩序を、一首ごとにわたしたちは問い返し、学び、ふたたび自分の手で新しい生きた秩序形成へとむかうのだ。一首一首が、自由な精神の発露による秩序へ向かう働きである。

## 新刊 高橋則子歌集

### 窓

来て動くこの単純を見むと寄る窓  
ちかぢかかと地面に雀

現代短歌社

定価 二八〇〇円（税別）

## 新刊 阿木津 英著

### アララギの釋 迢空

アララギに迢空が在籍した期間は、短歌の近代の重要な結節点であった。本書は、島木赤彦との密かな葛藤のドラマを浮き彫りにしつつ、迢空・短歌文体の形成過程を明かす、贅力の論稿！

砂子屋書房

定価 三〇〇〇円（税別）